

保育者の専門性を高めるロール・プレイング活用

— その意義と研修成果 —

| | |
|----------------------|----------------|
| 植草一世 ^[1] | 植草学園大学発達教育学部 |
| 大木みわ ^[2] | 植草学園大学発達教育学部 |
| 木下勝世 ^[3] | 植草学園大学発達教育学部 |
| 鈴木朱美 ^[4] | 植草学園大学附属弁天幼稚園 |
| 石川明子 ^[5] | 植草学園大学附属弁天幼稚園 |
| 平野有佳子 ^[6] | 植草学園大学附属弁天幼稚園 |
| 伊藤鉄夫 ^[7] | 千葉ロール・プレイング研究会 |
| 時田 学 ^[8] | 日本大学商学部 |

Role Playing Method for Professional Training of Preschool Teachers

— Training Results and the Significance —

| | |
|-----------------|--|
| Kazuyo UEKUSA | Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University |
| Miwa OOKI | Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University |
| Kishita KATSUYO | Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University |
| Akemi SUZUKI | Benten Kindergarten attached to Uekusa Gakuen University |
| Akiko ISHIKAWA | Benten Kindergarten attached to Uekusa Gakuen University |
| Yukako HIRANO | Benten Kindergarten attached to Uekusa Gakuen University |
| Tetsuo ITO | Society for study of Chiba Role-Playing |
| Gaku TOKITA | College of Commerce Nihon University |

[1] 著者連絡先：植草一世

[2] 大木みわ

[3] 木下勝世

[4] 鈴木朱美

[5] 石川明子

[6] 平野有佳子

[7] 伊藤鉄夫

[8] 時田学

平成 23 年 1 月、文部科学省の中央教育審議会において、幼稚園、小学校教諭養成大学における授業内容の中に、専門性を高めるためにロール・プレイングを導入することが求められた。本研究では、保育者養成課程で実際にロール・プレイングをどのように活用していくのかを考察した。

学生と現職保育者が一緒に研修を行った結果、学生に関しては子どもとの関係に問題点、困難性を実感できないということが明らかになった。現職保育者に関しては学生の経験不足に気づくことができたとともに保育での悩みを癒やされるという効果があった。このようなことから、ロール・プレイングは、保育に対する基本的な心構えをつくることに有効であると考えられた。学生にとっては、ピアノやお絵かき等の保育技術にも増して子どもの心情や動作を細やかにとらえることが意外と難しく重要であることを学ぶことができた。現職保育者にとっては、学生の経験不足に気づくことができ実習の受け入れ方に変化をもたらすことが期待できる。また、今までの保育を振り返り悩みを仲間と共有できたという利点があった。これらのことからロール・プレイングによって得られる人間関係に対する気づきが保育者や子どもの成長にとって重要であると考えられた。

キーワード： 保育者の資質， ロール・プレイング， 技能研修， 現場との連携， 人間関係

In January 2011, the Central Council for Education advised preschool teachers' colleges to introduce the role-playing method into the curriculum in order to improve the skills of teachers. In this study, the usefulness of the role-playing method for college teaching trainees and the preschool teachers was examined. Ways of applying the method in the college curriculum were also analyzed.

The results showed that teaching trainees could not understand children's feelings due to a lack of experience with them, something the preschool teachers were able to recognize. These same teachers were also able to gain some kind of relief from this training, with regards to the daily difficulties of teaching. Due to these effects, it was concluded that the role-playing method was useful in forming a base of preparation for the act of dealing with children. The trainees learned the difficulties in understanding the feeling and needs of children, which was seen as something more important than mere knowledge and skills of how to perform daily school activities. The preschool teachers were able to notice the lack of experience in the college trainees and could therefore be expected to change their own way of dealing with students. In addition, they were able to share their difficulties about children with colleagues. Allowing students to learn the importance of forming good relationships was thought to be a significant aspect of the role-playing method.

Keywords : Quality of preschool teacher, Role Playing Method, Training of teaching skills,
Cooperation of preschools and colleges, Human relationship

1. はじめに 保育者に求められるもの

1.1 保育者の立場

(1) 幼稚園生活の主体者としての子ども

幼稚園教育の基本は、幼稚園を子どもが子どもらしく生きる場にある。子どもらしく生きるとは、安心し、充実し、満足して生きるということである。幼稚園生活を子どものための生活にすることが、幼稚園教育の基本なのである。

このような生活の場において、子どもは自らの関心

に基づいて周囲の環境と活発に関わり、思うがまま活動を起こし、これを展開する。幼稚園生活においては、子どもが主体者なのである。

(2) 子どもとの共同生活者としての保育者

子どもが主体者であるとすれば、保育者の立場は何か。それは子どもと共に生活する仲間であり、共同生活者である。保育者は大人であるから、子どもに必要なことを指導し、諭し、注意を与えることも当然ある。しかしそれは子どもの上に立ち、子どもと別次元にいる命令者なのではない。あくまで、同一の生活の場に

共にいる者としての行為なのである。

(3) 子どもに対する信頼と敬愛

子どもとの共同生活者の立場とは、その根底に子どもに対する信頼と敬愛がある。子どもと保育者は共に生活する中でお互いに育て合っている。子どもは、保育者の感化を受けて育つ一方、保育者も子どもの存在を通して保育者として育てられているのである。このことを自覚することができたとき、保育者は真に保育者としての成長の道に立つことになるのだろう。

1.2 保育者の役割

(1) 子どもを支える

保育者の役割の第1は子どもを支えることにある。子どもの心と体を支え、子どもの生活を支え、子どもの成長を支えるのである。

また子どもを支えるとは、「この子はどうしてほしいのか」子どもの求めを感じ取り、「この子に私は何をしてあげられるか」を考えることである。

子どもを支える、その子と世界を共有し、その子の今を感じ取り、その子と共感し合うことを通じて子どもを知ることである。

さらに子どもを支えるとは、子どもを受け入れるということである。それは、子どもがかわいくて好きだということであり、子どもとの全人格的な出会いにおいて、その子のあるがままを受け入れることである。

(2) 子どもと共に生きる

既に述べたように、保育者は子どもとの共同生活者であり、子どもに何かをさせようとする前に、子どもと共感し合う仲間でいようとするものである。

共に生活する保育者の自然で無意識の言動が、子どもに大きな影響を与える。そればかりでなく、子どもは保育者の心底の思いまで感じ取り、自分の思いとして取り込んでしまうのである。

(3) 保護者と共に歩む

幼稚園教育の仕事の半分は子どもを育てることに、残りの半分は保護者を育てることに割かれる、と言ってもあながち過言でない。特に子育てにたくさんの悩みや問題を抱えやすい現代においては、保護者を支援することが保育者にとって大きな役割である。

保護者のかかえる問題や悩みは様々である。過去に同様の問題をくりぬけてきたベテラン保育者であっても、個々のケースが抱える問題の複雑さに対して、

簡単に答えを見出すことはできない。まして若い保育者はこうした保護者との会話を苦痛にさえ感じる。しかしここで大切なことは答えを提示することではない。保護者の語ることを真摯に聞き、一緒に悩む良い聞き手になることが求められるのである。

1.3 保育者の資質と成長

これまで保育者の立場や役割を概観してきたが、そこから見えてくる保育者に必要な資質とは、決して技術的な事柄ではない。保育者に求められる資質とは、人間に対する深い愛情や洞察であり、人との関係における真摯な姿勢や感性である。

保育者養成の段階では、学生は指導技術の巧拙や種類の多寡が課題となりやすい。また、教育(保育)現場に出て間もない保育者にとっては、ベテラン保育者が日ごろ発揮する保育指導の技術や力量を羨望の思いで見ることになる。保育者としての歩みの初期段階においては、保育者に求められる深い次元の資質については意識されにくいものなのであろう。

学生や新任保育者が、良い保育者として育つためには、子どもや保護者と共に生きる姿勢を持ち、そのための関係性に気づけるようになることが肝心である。そのような保育者としての育ちを促すために、ロール・プレイング(以下R・Pと示す)が、有効な手立てとなるのではないかと本研究者は考えた。なぜならばR・Pでは、様々な役割を取りながら、自分や相手の心に気づくという側面があるからである。

2. 保育者養成とR・P

2.1 R・P活用について

教員(保育者)に求められる資質能力について、平成23年1月の文部科学省中央教育審議会の資質能力向上特別部会では、それは高度な専門性と社会性、実践的指導力、コミュニケーション力、チームで対応する力、一斉指導のみならず、創造的・共働的な学び、コミュニケーション型の学びに対応できる力である、としている¹⁾。これらの力を有することで将来、教員(保育者)になった時に、教職生活をより円滑にスタートできるようになると期待される。そのような力を得るために「教科に関する科目

及び教職に関する科目の知見を総合的に結集するとともに学校現場の視点を取り入れながら内容を組み立てていくことが重要である」として、教職課程の授業内容の中に、現場との連携やR・P活用を求めている。小、中学校の教育現場にR・Pを取り入れることは、すでに時田ら(1992)によって研究、実践されてきた。しかし、幼稚園や保育所等の保育現場でR・Pを活用することに対しては、保育者自身のR・P経験が乏しく、その育成や指導方法等十分な実践的研究がなされていないため、保育現場での理解が不十分なまま使用されているのではないかという懸念がある。それは、大学の教育課程がかかえる問題でもある。

そこで本研究者は、大学の授業内容に役割演技(R・P)とり入れることをイメージして、学生と現職の保育者参加の研修^{注)}を進めてきた。研修の内容は様々な場面を想定した役割演技(R・P)や事例研究のほか、現職保育者との意見交換等を通じて、教職の意義や保育者の役割、職務内容、子どもに対する責任等を理解しているかを確認することであった。

2.2 用語の定義

まず、本研究で述べるR・Pを定義する。それはモレノ(Jacob Levy Moreno, 1889~1974)の創始した心理劇で使われた用語である。R・Pは自己の感じ方に基づく即興的心理劇での役割演技のことを示す。特にR・P(役割演技)では、役割(ロール)を創造的に自発的に行うこと、それに対してロール・テイキング(以下R・Tと示す)は役割取得という。R・Tは、集団や社会が自分に何を期待しているのかという役割期待を知り、どうすればその役割を果たせるかを学習(役割学習)することと関係しており、自発的な役割演技とは異なる。人は時として自身の役割が不明確になり、他人からの役割期待から「役割葛藤」が生じることがある。R・Pをすることで、架空の状況を演じながら日常の自分の役割行動を振り返り、よりよい人間関係をつくるよう意欲を高めることが期待できる。さらにR・Pによる創造的な保育者の役割学習では、子ども役を行うなど役割交換することで多様な役割を経験することが可能となる。その創造的な役割学習を具体的に説明すると、小さ

な集団の中で、舞台上上がった「主役」は、自由な発想で本人の夢を演じたり、子どもの役割の中で、その子の心になって語ったり、幼かった頃の夢「野球の選手」や「歌手」等を舞台上で表現することがある。R・Pによって「主役」が夢を演じる時に、「監督」と、主役の相手役、それを観て共感してくれる参加者がいることで実現された体験となる。相手をしてくれる役を「補助自我」と呼び、見ている人を「観客」という。監督は、主題を設定し、劇を演出する。その過程で出される参加者の感想等によるシェアリングや演者の感情や役割関係を明らかにしながら進めていく。教育現場で実施する場合、日常をよく知っている担任教師が行うことに意義がある。

3. 事前調査

3.1 目的と方法

保育志望の学生と現職保育者にアンケート調査を行い、人間関係を取り扱う研修が安全にできるのかどうかを確認する。またそれに基づいて、保育者の立場、役割、資質と成長の観点からR・P活用の研修のあり方を検討する。この検討に基づいて、R・Pの実施指針を得る。

- (1) 対象：U大学の学生、3年生(5名)、
4年生(4名) 計9名
U大学附属幼稚園2園の教諭(勤務年数)
30年以上(2名)、10年以上(2名)
5年以上(8名)、5年未満(6名) 計18名
合計27名

- (2) 期間：平成22年9月～平成23年5月

- (3) 手順

- ①幼稚園教諭の問題点、困難性のアンケート調査
- ②R・Pの経験等のアンケート調査
- ③アンケートの結果の整理
- ④アンケート内容の考察

3.2 事前調査の結果

参加者のアンケート(自由筆記)の分析を行い、まとめた結果の記述を以下に示す。分析については、複数の本研究者で確認した。

- (1) 幼稚園教諭の困難性や問題点について

○学生：保育技術（9名中8名），集団の子どもの掌握（9名中6名），けんかの対応（9名中5名），障害のある子の対応（9名中5名）

○保育者：特別支援を必要とするS児の理解（経験10年以上，2名中1名），発達遅滞を持つ子の親への対応（経験4年，4名中1名，経験10年以上，2名中1名，計2名），パニックを起こす子，気になる子の対応（経験5年以下，6名中2名）（経験5年以下，6名中1名），保護者（母親）が精神状態に波があり，役員を引き受けたが実際は活動できない，対応に気を遣う（経験30年以上，2名中1名），子どもの欠席等を連絡しない親。言葉を選びながら注意すると，返事は良くしてくれるが改善しない（経験30年以上，2名中1名），夫婦関係に問題があり個人的な問題に踏み込めない・子どもが不安定（経験30年以上，2名中1名），3才児の子に対して保護者（母親）がとても早口（経験5年以上，8名中1名），母親同士のトラブルが多い親の対応（経験5年未満，6人中1名，経験5年以上8名中1名，計2名）

自分の家族との関係（経験5年以上，8名中1名）

(2) 参加者のR・P経験：未経験者のみ

3.3 事前調査の考察

「保育に対する実際の問題点」についてのアンケートでは，学生と現職保育者では明らかに違った結果となった。保育者は，日常の保育で差し迫った課題に直面している。それに比べ学生は，今の課題であるピアノやお絵かき等の保育技術ばかりに意識が向きがちであることが明らかになった。学生にとって，教育(保育)現場での問題は，経験のない状況のことであり把握出来ない。

事前調査では，同職場の保育者間でのトラブルは上がらず，人間関係は比較的安定していることが確認された。そのため人間関係の問題を取り上げたテーマも受け入れられると考える。参加者は，R・P初心者ばかりなので，講義は最小限に行い体験を重視することにする。上記の事柄を配慮して，日頃保育で気になる状況をテーマとして選ぶ。その後，参加者の自発的な発言を促し，参加者のニーズにあったテーマをその場で設定していく。学生にとっては，

より保育の場における現実度の高い場面を経験する事になり，現職保育者にとっては，実践を振り返り自己点検の場となると考えられる。

4. R・Pの活用の実践研究

4.1 研究の目的と方法

(1) 目的：教員（保育者）養成にR・Pが実際に役立つかについて，学生と現職保育者のR・P体験を通じて検討する。

①R・Pの体験によって，机上の学習を越えた気づき，自己理解，他者理解の深化が期待される。それらが確認されればR・Pの職能教育における有効性が検証されたことになる。

②参加者が自信と意欲をもって望む職業に取り組めるようにするための条件について検証する。

③教員（保育者）に求められる立場と役割と成長について検証する。

の3つの視点から，研修実践を検討しR・Pの効果的な活用法について確認する。

(2) 研究の対象(研修参加者)

対象：・U大学学生（9名）・U大学附属幼稚園教諭（18名，内2名はH23年度新任，H23年5月の参加）・千葉R・P研究会会員（6名）

合計33名

(3) 研究期間：平成22年9月～平成23年10月

(4) 研究の手順

①研修の実施とビデオ，筆記の記録

②研修の記録の整理

③参加者の感想の整理

④研修記録とアンケートの分析，考察

4.2 研修について

(1) 研修会場：U大学附属幼稚園遊戯室

U大学附属幼稚園遊戯室は暗幕やステージ等が活用できR・P舞台に適している。

(2) 日時：土曜日の幼稚園と大学の都合の良い時間を抽出し設定した。

・平成22年9月～23年5月，土曜日のみ5回

・全18時間（2時間×9コマ），13セッション

(3) 監督：西村正司(研修1)，時田学(研修1～4)，

大木みわ(研修 4, 5)

(4)セッションのテーマ：参加者の話し合いで決めた。友人との関係(1件)，保護者との関係(1件)，子どもと子ども(4件)，子どもと保育者(6件)，ウォーミングアップ(1件)の13件が行われた。

＜研修1：22年9月25日（土曜日）＞

- ・顔合わせ
- ・講義：R・Pの基礎（①役割と遊び，②役割と行動，③R・Pと役割，④R・Pの基礎的要素，⑤R・Pの流れ，⑥実施に向けての留意点）
- ・R・Pの実際Ⅰ：日常の会話から
 - セッション1：喫茶店での男女の会話
 - セッション2：担任保育者と忙しい保護者

＜研修2：22年11月27日（土曜日）＞

- ・講義：R・PとR・T
- ・R・Pの実際Ⅱ：幼稚園の子どもの様子
 - セッション3：いつもいっしょの太郎と花子

＜研修3：22年12月18日（土曜日）＞

- ・R・Pの実際Ⅲ：子どもと先生
 - セッション4：朝のしたくをしない子
 - セッション5：おしゃべり大好きな子
 - セッション6：先生のお手伝い
 - セッション7：おどる子
 - セッション8：ごまだんごとどろだんご
 - セッション9：気になる子

＜研修4：22年1月29日（土曜日）＞

- ・R・Pの実際Ⅳ：気になる子ども
 - セッション10：いたずらっ子の太郎と花子
 - セッション11：お弁当を食べたがらない子

＜研修5：22年5月14日（土曜日）＞

- ・講義：研修を現場に生かすために
- ・R・Pの実際Ⅴ：保育の場面，日常の保育
 - セッション12：ウォーミングアップ
 - セッション13：玩具の片付け

5. 結果

5.1 分析の対象

セッション2, 8, 13を分析の対象とする。

5.2 観客体験①

保護者と保育者の関係を観客であったU幼稚園副園長の記述から以下に述べる。

(1)展開：セッション2「担任保育者と忙しい保護者」は，保護者と保育者をそれぞれ現職保育者が演じた。保育中起こったトラブルを含め，日頃乱暴な行動が目立つ子どもの様子を担任が保護者に伝えたという設定であった。保育者が降園後に保護者を呼び止めても，「今日は約束があり忙しいから」と応じてくれない。保育者は今日こそは話したいと懸命に声を掛けるが，「時間がない」「忙しい」と断られてしまった。

(2)場面の振り返り：監督からストップがかかり確認がある。演者の気持ちや観客の意見を監督が聞く。保育者の立場に立った感想は，「自分の子どものことよりも約束が大事なのかと，親を批判する気持ちをもった」「自分が嫌われているので話を聞いてもらえないという不安」「親に対してこうあるべきという教師特有の上から目線なのかという疑問」とある。保護者側の感想として「本当に忙しい」とそれぞれの意見や気持ちが引き出された。

テーマの提供者は普段から親との関係に問題を感じている保育者であった。それに対して副園長の感想に「保護者の背景があまり見えないし、保護者の背景を深く考えていないからではないか。また、同じ保育者という立場で演じていたので、どうしても保育者側に気持ちが偏っていたのではないか。」とある。（*考察5へ）

(3)役の交代：演者の役を交代して設定や会話を変えず行なった。保育者として話を聞いてもらいたいと思っていた人が，保護者役になって「早く帰りたい」という演技方をしていた。保育者である演者は何とか話を聞いて欲しいと言葉を掛けるが，保護者のペースに飲み込まれてしまったように感じられた。両者の演じた後の感想では，「忙しくゆとりがないという思いを伝えたかった」（保護者役），「ゆとりがないことを理解した」（保育者役）など，見方も感じ方も前とは違っていた（*考察3へ）。

(4)感想：副園長という立場で普段から子どもに不利がないよう対策を練り，よりよい成長を促したいという思いが強い。「自分の子どものために時間を割けないものだろうか・・・」という思いであった。このような思いは，保護者の側から「上から目線」

「相談しにくい」というように受け取られてしまうかも知れない。R・P を行うことで、日頃の保育を丁寧に振り返ったり、いろいろな視点で見たり聞いたり演じたりして、保育に対する見方や人間性を深めることができる。保育者を目指す学生や現場の保育者は、R・P を取り入れることによって、今の役割(自分)を知ることができるとともに「相手」のことを考えることにもなる。(※考察3へ)

5.3 演者体験

子どもと保育者の関係を演者のU幼稚園主任教諭の記述から以下に述べる。

(1)展開：セッション8「ごまだんごとどろだんご」は、保育者を主任教諭、子ども役を大学の教員が演じた。砂場であそんでいたA児は、砂でだんごが作れるようになった。保育者と一緒に「あんこ、きなこ…」とイメージを膨らませながらいくつもだんごを作っていた。昼食の時間になり、他の園児は入室するが、周りの様子を気にせずに遊んでいる場面が演じられた。

(2)場面の振り返り：保育者の役を演じ、自分の気持ちの変化に視点をおいて場面を振り返ると、A児がだんごを上手に作れるようになった成長を喜び、次々作られるだんごをおいしそうに食べてみせた。

「あんこ、ごま…」といってA児のイメージを保育者も共有しており、互いに楽しく心地よい時間が流れているように感じた。しかし、A児を他の園児と同じように入室させなくてはいけないという思いになった。A児の遊びたいという思いを知りながら、入室して欲しいという気持ちを伝えるという対応をした。

(3)参加者の感想を聞く：R・P が終わり、園児役、観客からの感想や思いを聞くことによって、自分の気持ちの変化に気づいた。実践している時は園児と同じ空間を共有し、寄り添いながら共感しているつもりでいたが、園児や観客にはそう捉えられていない。片付け優先の先生に見えたようだ。園児役の感想から、自分の要求が保育者に聞き入れられ遊び仲間(味方)になっている思いが膨らんでいたことが分かった。しかし保育者は片付けのことが気になり本気で遊びを楽しんでいないと敏感に感じていた。園児役は、保育者が一緒に遊んでくれた時は「ごま

だんご」を作っていたが、保育者が「片付け」をしようとした時から、「どろのだんご」にしか見えなくなった、と感想を述べている。(※考察4へ)

(4)感想：日々の保育の中ではこのような場面は多々あり、子どもの思いは一日の流れの中で埋もれていってしまう。子どもを理解し寄り添っているつもりであったが、一つひとつの言動を皆で振り返ったことにより、子どもの本当の気持ちについて考察を深めることができた。(※考察2, 3へ)

同僚の観客からは、子どもへの対応が「いつもの先生と違う」と指摘された。舞台で自由に演じていたせいか普段とは違った自分であった。(※考察5, 6へ)

5.4 観客体験②

新任保育者の視点を見るために、観客であったU幼稚園新任保育者の記述を以下に述べる。

年度が替わった平成23年5月14日に実施されたR・Pは、4月に赴任したばかりの私と新任Bが初めて参加した。私は他園で12年勤務経験がある。Bは3月に短大を卒業したばかりの初任者である。両者ともR・P経験はない。

(1)展開：セッション13「玩具の片付け」では、保育者と学生が行った。遊んでいる園児と片付けを促す担任という設定であった。1回目は学生のみで構成し、2回目は園児を学生2名と保育者2名、担任役を保育者(主任)が担った。子ども役の保育者は積み木を長く並べ電車に見立て、遊びに没頭していた。

(2)振り返り：現職保育者による保育者役、子ども役はスムーズであった。舞台に立っても物怖じしない。(※考察7へ)それに比べ学生は、「子どもになって遊ぶ」こと自体が難しかった。保育者の様子を見て圧倒され、積み木を手にとってはいけるもののどう遊んでいいのか分からず様子を窺う状態であった。(※考察1, 8へ)

(3)観客の視点：前任保育者間では気心が知れる雰囲気すでに醸し出されている。それは昨年度R・Pを4回経験しているということだけではなく、日常の仕事の中で互いに良好な同僚関係が構築されているからであろう。日々の保育活動の中で、子ども観や遊び観も共有されていることもあり、保育者

間の共通理解が自ずと生まれてきて、互いに表現を受け止め合いながら演技が進んでいるように感じた。

(4)感想：保育者間の R・P は、生き生きと演じられ、ストーリーが生まれていく様子は R・P が盛り上がっているかと捉えられるが、日常の再現に終始し新しい見方が生まれにくいという側面をもつと思われた。日頃、保育経験者が無意識に行っている保育活動を意識化できるのが R・P を行う意味でもあるので、気心知れた心地よい関係だけではなく、異質な要素によって価値観が揺さぶられる状況が生まれることも必要といえる。そういった意味でも、学生や新任者の参加の仕方を考えなければならないという感想を持った。

新任者は演技に保育観が投影されると考えてしまうため、評価の視点で参観されるのではないかと考えてしまった。そのためウォーミングアップをした後にもかかわらず心身ともに緊張が解けず、「役に当たらずにホッとした」というのが本心であった。同様の理由で学生が幼稚園の場で保育者と一緒に行う R・P は、学生自身の気持ちを正直に表現しにくいのではないかと思った。

5.5 考察

(1) 学生の学び

考察 1<保育者に求められる資質の発見>

セッション 13 の保育の場面では保育者が玩具の片付けを子ども達に促した。観客の目には、学生と現職保育者では子どもの対応力に明確な差が見え、それは学生にとって机上で考えていた保育技術とは次元の違うものであった。現職保育者の R・P を見て学生側は、保育における「問題が明確化」したと答えている。以前には保育者になるための大切な資質として保育技術をあげていた多くの学生も、子ども役をして初めて相手の立場や目線に立つことの意味や、コミュニケーションの重要性に気づいている。現場の保育者は、経験の積み重ねによって子どもの心を読み取ることが容易になっている。そのため、即座に役割をとり、なりきることができるのである。言い換えれば、保育者という職業に求められている「相手の立場に立つ」ことができるということである。だから、場に応じて生き生き演じることができ

るのである。このような保育者に求められる資質を「相手の立場に立つ」「自分を開く」といった体験ができる R・P で、役割期待から離れて表現する力を養うことによって得られるのである。その意味からいって R・P は、保育者養成に有効な教授法であると考えられる。

考察 2<保育の場面に近い体験>

学生が実習等で子どもの前に立つ前に、現職保育者と R・P をすることで実際の保育の場面に近い体験ができる。そこでは、学生同士では気付き得ない価値観に触れ、学生同士では生まれない状況に出合い、より本物に近い保育の空気を全身で感じる体験ができる。R・P は知識として知っていたことを体験し、自身の保育力へとつなげる場となりうるというよいであろう。

(2) 現職保育者の学び

考察 3<自己理解、他者理解>

セッション 2、セッション 8 では、子ども役や保護者役を交換することによって、「子どもや親は保育者を困らせようと思ってやっているのではない」という気づきがあった。

保育者体験から見えたことは、「早くしなさい」の言葉掛けに関して、なぜ時間を気にして「子どもを急がせるのか」ということに注目した。保育者としての視点から子どもの視点に変えて考える機会であった。それは日常の我を振り返って考える機会となった。また、親は「ゆとり」がなく自分の事しか見えていないと他者理解ともいえる感想を述べるに至る。

R・P で演じられた場面で、関係を丁寧に振り返ることによって、人間関係の問題が整理され、参加者の間で共有される。参加者がこの過程を体験することで、仲間や同僚に理解され受け入れられたと感想で述べている。このことから R・P 活用の意義を改めて確認した。

考察 4<ごっこ遊び、見立て遊び>

セッション 8 は、子どものごっこ遊び、見立て遊びであった。子ども役は夢中でだんごを作って遊んでいる。はじめは頭の中ではしっかりと「おだんご」をイメージしている遊びではあったが、保育者の気が逸れてからはただの「どろだんご」になっていて、大人の顔色をうかがうだけの状況となった。

子どもの遊びの質は保育者の関わり方によって大きく影響する事が確認できた。しかし保育者は日常の中で遊びを中断することとも必要となる。保育者が子どもの気持ちに沿って役割を取ることによって普段とは違う関係となるのではないか。

(3) R・P 活用の研修の確認と課題

考察 5<日常の役割からの解放>

セッション 2の観客は、保育者役が「保護者の背景など深く考えていなかった」という感想を述べた。R・P は、現実の再現とは違い演じられていることや、そこで起こっている関係を丁寧に見ていくことにある。背景など考えずに自由に舞台の上で感じたまを演じる。それは日常の役割から解放され本来の自分を取り戻す機会となる。役職の立場からは、後輩を指導する意見になりがちであることを監督に指摘された。そのような「ねばならない」の世界ではなく、R・P は日常の役割から解放され、本来の保育者の立場、役割の基本に立つて行うことが大切であると再確認された。他で行われる研修との大きな違いである。

考察 6<R・P と R・T の理解>

監督からは前もって、R・P(役割演技)と R・T(役割期待)の講義があり、参加者は知識としてその違いを理解できていたと推察される。しかし実際に演じてみると普段の役割から離れられないことがある。たとえばセッション 8の演者は、観客に指摘され、そのことに気づいたと感想で述べている。日常に縛られず自由に演じられていたとしたら R・P ができていたといえるだろう。

考察 7<舞台慣れしている現職保育者>

現職保育者は職種の性質上、非常に舞台慣れしている特殊なメンバーである。しかし舞台慣れしていることが日常の役割を解除することにはならず、内省につながらないこともあることが確認された。

考察 8<学生と現職保育者が一緒に行くこと>

現職保育者が保育の中で普段何気なくやっている子どもへの対応が、学生には大変むずかしく、そのギャップが大きい事が確認された。現職保育者の子どもへの対応は、自分の経験の積み重ねによって可能となるのであり、学生がうまく対応できないのは努力不足だけではないことが確認された。学生は現職保育者と比較され保育能力が問われるようで、緊

張感がアップすると答えている。現職保育者を前にすると、R・P の役割に入り込み、その役割としての気持ちを「感じる」という段階に到達するのでさえ難しいように見受けられた。現職保育者らは現場の経験があるからこそ、子どもの受け答え等の具体的な状況を生み出すことができる。経験が欠けている学生は与えられた役割やテーマを具体的にイメージしにくく、そこで生じる「思い」を実感することもままならなかったのである。「思い」があって共感が生じるわけだから共感できなかったとしてもしかたのないことである。また緊張していたことも影響していたであろう。

6. 総合考察

職場での研修は、先輩から後輩への保育方法の伝授になりがちである。R・P の研修は、関係性を見ることに軸を置く。その確認は随時必要となった。また R・P の研修では演者、観客など、いろいろな役割を経験することによって、それぞれ違った立場からの感じ方や思いなどを聞くことができ、相手の心の動きに気付くことができた。

人は役割を演じるとき期待された役割をとることを考えがちであるが、R・P は正解を追求するのではないということ、一人ひとりが「感じる」ことに意味があるのである。

R・P の体験は、机上の学習を超えた参加者の気づき、自己理解、他者理解の深化が期待され、体験的職能研修として効果的であるという結論を導いた。学生にとっては、保育技術にも増して子どもの心情や動作を細やかにとらえることが意外と難しく重要であることを学ぶことができた。現職保育者にとっては、学生の経験不足に気づくことができ、実習の受け入れ方に変化をもたらすことが期待できる。また、今までの自分の保育を振り返り、悩みを仲間と共有できたという利点もあった。また、R・P は、教員(保育者)自身が多様なロールを獲得し、自分自身を客観的にとらえるためのトレーニングとなる可能性を秘めている。従って R・P は保育に対する基本的な構えをつくるため有効であると考えられる。

R・P は、多様な立場の者が同じ土俵で演じ語り合

える。しかし R・P を教員（保育者）養成に取り入れるにあたって配慮したいのは、R・P がうまく機能しないと、演じることにストレスを感じたり、意欲を失ったりという側面ももち合わせているということである²⁾。心が解放され楽しく行ってこそ意味がある。ウォーミングアップの役割の重要性について今後の課題である。経験年数の長い教員（保育者）、新任保育者、他園の教員（保育者）、学生といった様々な立場の参加者が集まって R・P をするということの意味やもち方を、今後も考えていく必要がある。学生と現職保育者の研修は参加した段階では有意義という感想をもったのであるが、参加者に研修に関する共通の目的意識を持たせ、同じ場で研修を設定することには、課題が多く残った。例えば学生と現職保育者の時間や場所の調整、現職保育者の勤務体制等の問題である。しかし、R・P の有効性が分かってきたので、さらに実践、調査、分析を続けていく予定である。

7. 倫理的配慮

個人情報には十分配慮し、個人が特定できるデータは載せていない。得られた記録は本研究以外には用いない。

8. 謝辞

本研究を進めるにあたり、千葉ロール・プレイング研究会会員の皆様、植草学園大学附属弁天幼稚園、美浜幼稚園の先生方の多大なご協力を得ました。また本研究の立ち上げには故西村正司先生のご指導がありました。記してここに感謝いたします。

なお、本研究は、H22～H23 年度「植草学園大学共同研究」の研究助成費を受け行ったものである。

9. 引用文献

- 1) 文部科学省中央教育審議会、資質能力向上特別部会。教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向

上方策について（審議経過報告）。2011。

- 2) 山本淳子 岸本明子. 教育実習生の役割演技行動とストレス反応、自己評価との関連、香川大学教育実践総合研究. 2006;13:61－69.

10. 参考文献

- 1) 時田光人. 教育心理劇による学生相談の実際-ロール・プレイングの効果-. 千葉大学保健管理センター 1992.
- 2) 金子賢. 教師のためのロール・プレイング入門, 学事出版 1992.
- 3) 外林大作監修, 千葉ロール・プレイング研究会. 教育現場におけるロール・プレイングの手引き. 誠信書房. 1981.
- 4) Raymond J. Corsini, 金子 賢 (監訳). 心理療法に生かすロールプレイング・マニュアル. 金子書房. 2004.
- 5) 小野けい子 他. 心理臨床とイメージ. 財団法人 放送大学教育振興会. 2010.
- 6) 厚生労働省. 保育所保育指針. 厚生労働省告示第 141 号. 2008.
- 7) 文部科学省, 幼稚園教育要領. 文部科学省告示第 26 号. 2008.

注) 植草学園大学共同研究. 教育現場における教師(保育者)の資質を高めるためのロール・プレイング活用に関する共同的研究. 2010, 2011.